

このところ一進一退ではあるが、確実に春の息吹を感じる日が多くなった。けれども若者たちをめぐる情勢は、ますます厳しさを増すばかりだ。若者たちの生き辛さが、社会的暴走にまで深刻化している。札幌で、千葉県柏市で、そして全国の至る所で！ ここまで書いてきたら、突然の訪問者が現れた。仙台から20歳の娘さんと車で来た父親だった。過去に母親から電話で相談もあった件だった。残念ながらせつかくビバまで来たのに、娘さんは車から降りられないとの事で、父親にだけビバハウス館内を案内した。父親は、「いつか必ず娘が降りられるようになるまで頑張ります。ビバハウスがどんな所にあるのかだけでも分かった事は娘の為に良かったです。」と言って帰っていかれた。

突然の訪問で改めて実感させられたが、本当に相談者は多いが、実際にビバハウスまでたどり着ける例は極めて少ない。現にこの数週間は、東京の青年の件で父親と何度もメールの交換を続けている。父親は粘り強く息子さんと会話を続け、「～本人気分が落ち着いているとき、ビバへ訪問しようかなどと言っています～気分が波があり～翻弄されています。」と書いてきている。現在実際に電話相談のあるのは、道内の蘭越町(2件)、別海町、仙台市(中学3年男子)、札幌市などなどからの10名余りであるが、前95号で紹介した「つくば子どもと教育センター」の和気ご夫妻のおっしゃるごとく、「～ひきこもりの若者はなかなか居場所に来てくれません。」はまさにビバも毎回遭遇している現実である。

全国で100万をくだらないとも言われる、ニート、ひきこもりの若者に対して、彼らを生み出さざるを得ない社会を作っている国、政府の対応はまことにお粗末極まりない。いよいよ超少子高齢化、総人口減少化社会の中で、彼らを再生させ、来るべき社会の中核者として育て上げることに重要な仕事はないはずである。国家財政が持たないと、生活保護基準を切り下げ、受給条件を厳しくして全国で数多くの餓死者を出させながら、そのまま放置すれば必ず将来の潜在的な生活保護受給者予備軍になる彼らの救済のための先行投資をなぜ惜しむのか？安倍総理が寝言のように繰り返す「世界一の日本」を本当に目指すならば、まずは国の総力を挙げて直ちに「青年問題」の抜本的解決に取り組まなければ日本に明るい将来は開けない。

親たちの多くが異口同音に訴えているのは、地域の相談機関に相談しても、ほとんど実際の解決には繋がらないとの事である。平成22年7月の時点で、すでに内閣府は、「子ども若者育成支援推進法」の成立に合わせて、「社会生活を円滑に営む上で困難を有する子ども・若者への総合的な支援を社会全体で重層的に実施するために」との63ページに及ぶ提言を公表し、全国の自治体が具体的に取り組むべき課題を提示した。今こそ、この実践に、取り組む時である。